

# 平成二十六年年度鶴見大学仏教文化研究所公開シンポジウム・開会の辞

著者	伊藤 克子
雑誌名	鶴見大学仏教文化研究所紀要
号	20
ページ	3-4
発行年	2015-03
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1646/00000347/">http://id.nii.ac.jp/1646/00000347/</a>



## 開会の辞

鶴見大学仏教文化研究所所長 伊藤 克子

本日は鶴見大学仏教文化研究所公開シンポジウムにおいてを頂きまして、まことにありがとうございます。今開会式にあたって壇上から見ておりますと、聴衆の方々に交じってご本山で修行をされて、まさに今、臨床宗教師のコースを取られている修行僧の方々、それから鶴見大学付属高校の仏教専修科の高校生の皆さんもお見えくださっております。本当に皆様ありがとうございます。

本学の仏教文化研究所は関係者の皆様の多方面からのご支援をいただきまして、今年開設二十周年を迎えることができました。また鶴見大学の母体であります総持学園は、今年、創立九十周年を迎えます。学園創立九十周年であり、仏教文化研究所開設二十周年という、ダブルで記念する年になりました。この九十周年の記念事業といたしまして、仏教文化研究所を大学内研究所からもっと広く社会に開かれた研究所に組織替えいたしました。これは前学長であります木村清孝先生のご功績によるものでございます。

私はその木村学長の後任といたしまして今年四月一日に学長に就任いたしました。規程上、学長が仏教文化研究所の所長を兼ねるということになっておりますので、現在私はその任にあたってはおりますが、なにぶんにも専門分野の違いがありまして、その役目が十分に果たせるかどうか心もとないものがございます。しかしそこは、木村前所長が特別顧問としてお残りいただきまして、運営に研究に全面的にお力をお貸しくださることになっております。そのためむしろ研究活動は活発になるのではないかと、私は期待しているところでございます。

また本日は本学の先制医療研究センターとの共催で本日に時宜を得た企画を組むことが出来ました。今、世の中は高齢化社会ですが、宗教人に期待を寄せるのは、なにも高齢者ばかりではございません。東日本大震災の時のことを例に挙げるまでもなく、現在は宗教者が社会のいろいろな場面で、いろいろな形で地道な活動をなされております。これから先も、救いの手を必要とする人は増えることはあっても、減ることはないと思います。本日のシンポジウムが、宗教者でない私にとりましてもその心に近づく道を示してくれるのではないかと期待しております。講師の先生方をはじめ、皆様のご協力を得まして実りの多いシンポジウムになることを願っております。

大変簡単ではありますが、開会の言葉とさせていただきます。